

文化財と地域

～地域で育み、そして繋ぐ～



①



②



③



④



⑤

- ① 波除碑(牡丹3、寛政6年、1794)
- ② 五百羅漢道標(猿江2、文化2年、1805)
- ③ 木下川やくしみち道標(亀戸3、宝暦11年、1761)
- ④ 石造燈明台(富岡1 深川公園内、明治31年、1898)
- ⑤ 園女歌仙桜碑(富岡1 深川公園内、宝暦5年、1755)

下町文化



KOTO City in TOKYO
スポーツと人情が熱いまち 江東区

NO.
304
2024.1.19

発行
江東区地域振興部
文化観光課文化財係
〒135-8383
江東区東陽4-11-28
TEL(03)3647-9819
<https://www.city.koto.lg.jp/>

○文化財と地域

～地域で育み、そして繋ぐ～

○砂村の海苔養殖を語る

乾海苔の製造と問屋への運搬

○資料紹介

絵葉書はウソをつく 4

～関東大震災時の永代橋？ 厩橋？～

○大島の講と信仰を探る

斎藤家の御守・祈禱札

○関東大震災から100年

震災後の社会事業と江東区域

○深川「鶴左」の引き札

本区に残されている文化財は、地域の財産です。寺社への奉納物をはじめ、民間信仰や供養のために造られた石造物、目的地向かう人々を案内するための道標など、その当時は、生活に深く関わるものでした。しかし、時の経過とともに忘れさられ、顧みられなくなったものも少なくありません。文化財係では、そのような人々の暮らしの中から生まれたものを、本区の歴史と文化を現代に伝える文化遺産と位置づけ、地域の方々とともに保存に努めてまいりました。

このことは、文化財すべてに言えることですが、とくに野外にあるものは、長い間、雨風にさらされながらも、もちこたえて現在に残ったものです。時々の地域の人々の文化財に向けた眼差しによって、長い年月を乗り越え、現在に伝えられました。その時間は、長いもので300年以上になります。いわばもの言わぬ「歴史の語りべ」であり、地域の歴史や文化を学ぶ、基礎的な資料といえます。刻まれている人名や文字は、当時の人々のさまざまな思いや活動を伝える貴重なものです。今後とも、それらの文化財が地域のなかで、世代を超えて後世に繋がっていくことを願ってやみません。

(文化財主任専門員 出口宏幸)

■砂村の海苔養殖を語る

砂村の海苔養殖は、明治19年(1886)に始められ、その後、大正・昭和と続けられました。戦後になると、城東漁業協同組合が結成されますが、海の汚染や埋め立てなどが進められるなか、昭和37年(1962)12月、都内にあった他の漁業協同組合とともに漁業権を放棄しました。ここでは、江東区の海苔養殖について知るため、戦後の漁業権放棄に至る期間、養殖に従事されたU氏(故人)のお話しをご紹介します。聞き取りは、平成25年(2013)と同28年(2016)の2回にわたって行いました。

【船着場(船溜り)】

U氏は、昭和8年(1933)生まれで、16歳の頃(同23・24年ころ)から父親を手伝って漁業に従事しました。漁師は3代前から、海苔養殖が中心でした。

船着場は、永代通りと明治通りが合流する辺りのすぐ南側、すなわち現在の日曹橋交差点のやや南(新砂2-1北西隅付近)にありました。

日曹橋は、永代通りのすぐ南側を、通りに沿って東西に流れていた洲崎川に架かっていました。同橋が架橋され

たのは、戦後の昭和24年(1949)2月で、船着場は、その橋を南へ渡った東側にありました。船着場

では、川の北側に大きな荷足船が浮かべられ、小さいベカ船は南側に置かれていました。荷足船を北側に止めたのは、ルールに基づくものではなく、縄張りの意識によるものだったそうです。そのため、ベカ船に乗って川を渡り、反対側に浮かぶ荷足船に乗りました。当時は、ベカ船以外の船はすべて荷足船と呼んでいたそうで、U氏のおじが投網を打つために所有していた、ミヨシ(船先)に踊り場が造られ、人が立てるようになっていた船も、荷足船と呼んでいたそうです。



ベカ船

【養殖場へ】

養殖場へは、荷足船に何艘かのベカ船を横向きに積んで向かい、到着する

とベカ船を下ろし、養殖作業に取り掛かりました。U氏の家では、比較的小さな荷足船1艘とベカ船2艘(同氏は艘ではなくハイ(杯)と称した)を所有していたので、その2艘を荷足船に積んで養殖場へ向かいました。ちなみに、大きい荷足船は4艘を積んだそうです。養殖場までのルートは、以下の通りです(図1参照)。

船着場を出発した荷足船は、洲崎川を東に進み、大松橋手前を南に折れると、すぐに九重橋をくぐり、南砂町4丁目(現在の新砂2丁目)と南砂町9

丁目(同3丁目)の境にあった運河を通って海に出ました(現在の砂町北運河はその一部と思われます)。運河を出て南へ進むと、埋め立て前の「夢の島」(島状の砂洲)が左手に見え、そこを過ぎると、まず「若洲」、そして「御大典」、「出洲」と呼ばれた養殖場が続きました。出洲は、かなり沖合に位置したといえます。これらの養殖場以外には、深川との共同養殖場であった「大東沖」、そして荒川の東側の「二トオキ」「サントオキ」と呼ばれる養殖場がありました。

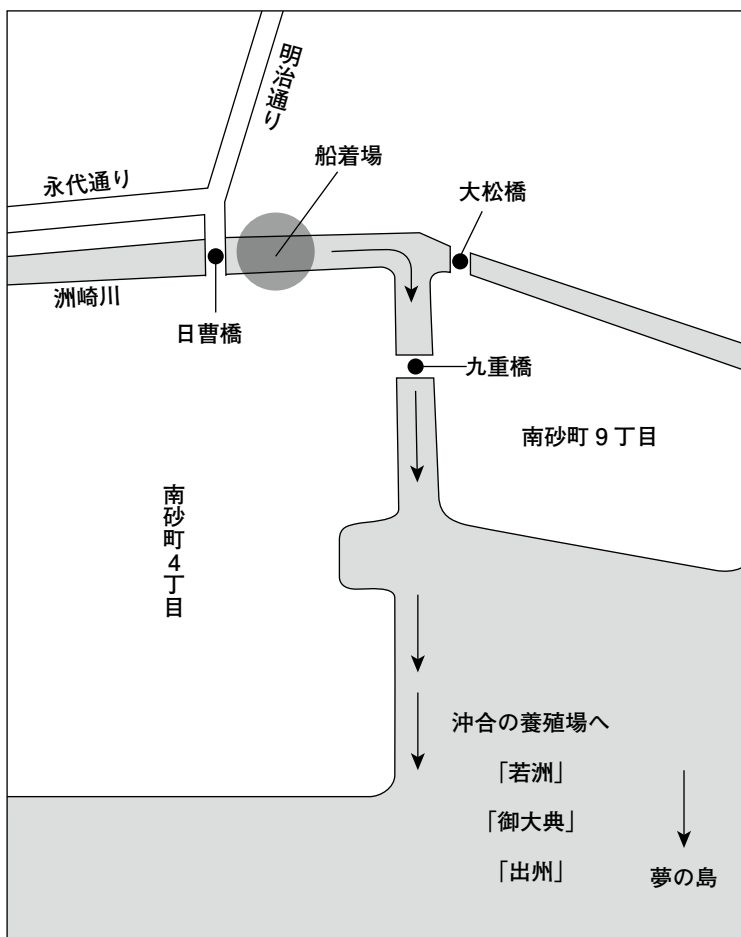


図1 U氏が海苔養殖に従事していた頃の南砂町概念図

【養殖場】

U氏が養殖に携わった戦後は、すでに網筈あみびになっており、養殖に際して網筈用の竹を建てました。しかし、海底の地質は、荒川を境に西側は泥地、東側（二トオキ、サントオキ）は砂地で異なっており、竹を建てるにあたって、泥地は竹が刺しやすかったのに対し、砂地は固く、砂を吹き飛ばす機械で穴をあけたといえます。

養殖場には、多くの海苔棚が設けられましたが、どれだけ使用できるかは組合で決められ、権利化されてい



海苔養殖場の様子

ました。規模は一棚が幅4尺しやく（1m20cm）、長さ25間けん（45m）でした。竹筈の長さは、1本が24尺（7m20cm）で、それを2本繋げて使いました。そのため、船に積むことができず、船の脇に結んで運んだということです。

【種付け】

種付けは、U氏の父が千葉方面（八幡宿わたじやく・五井い・奈良輪ならわなど）で行いました。種付け場まで船で網を運ぶ家もありましたが、U氏の家ではトラック（オート三輪さんりん）で運びました。何軒かの家も

便乗したそうです。海苔の胞子は、暖かくなると海底に沈み、貝などに付着しますが、秋の彼岸頃ひがん（9月下旬、水温20℃位）になると浮いてきて、網に付着しました。そうして、種付けを終えた網を10月下旬に持ち帰り、養殖場に張りました。

また、10月下旬から1月上旬には、種付けした網とは別の網を養殖場に張って、「ジッコ」の付着を待ちました。「ジッコ」とは、地元（地場）の胞子のことです。そのため、まず種付けの網から海苔採取がはじまり、その後遅れて「ジッコ」の採取となります。なぜ、千葉方面に比べ「ジッコ」の胞子の浮上が遅れるのかについては、わからないとのことでした。

【海苔採取】

生育した海苔は、3本の竹（約60cm間隔）に結ばれた網のうち、片側を外してもう一方の網から採取しました。その後、外した未採取の網を結び直し、採取した側の網を外したのち、未採取部分の海苔を採取しました。

出来の良し

悪しは、種付けの場所に大きく影響されましたが、成長するまでわ



網から海苔を摘み取る

かりませんでした。良い海苔は黒く、悪い海苔は青（緑）色になりました。前年が悪い出来の場合、翌年は種付けの場所を変えたようで、遠くは仙台まで行った人もいたようです。

【天候】

北の風は寒さ以外問題ありませんでしたが、羽田方面（南西）からの風には気を付ける必要がありました。風が

乾海苔の製造と問屋への運搬

養殖場から採ってきた生海苔は、その後、どのように四角い板状の乾海苔になり、海苔問屋に納入されたのでしょうか。

まず、生海苔は細長い海藻のため、包丁で細かく刻みました。①はその際に使用された飛行機包丁とよばれるものです。細かくした海苔は、海苔簀のりすとよばれる葦よしで編まれた四角い簀に載せ、天日干ししました。②は都電の線路沿いに並べて天日干ししている様子です。乾いた海苔（乾海苔）は、③の海苔保存箱で保管し、

その後、④の平箱で海苔問屋へ納入しました。自転車の荷台に積むなどして運



吹き始めるとうねった波になるため、いつせいに仕事を仕舞い、急ぎ帰りました。時には、危険を回避するため、まっすぐ北に進まず、深川方面を迂回うかして帰ったこともあったとのことでした。

以上、漁業権放棄に至る戦後の海苔養殖について、聞き取ったお話をまとめてみました。

（文化財主任専門員 出口宏幸）

搬したようです。

U氏の家には、大正13年（1924）の『海苔之通のりのかよ』（問屋の買い取りを記録した帳簿）が残されていました。表紙には、「山形屋惣八やまがた」と記されていることから、中央区日本橋の山形屋が当時の納入先であったことがわかります。海苔養殖は、秋の彼岸（9月後半）の頃から、春の彼岸（3月後半）の頃までの寒い時期に行われました。養殖から納入までのほとんどを人力で行ったことから、寒さの中での大変な作業だったことがわかります。

絵葉書はウソをつく4

〜関東大震災時の永代橋？ 厩橋？〜

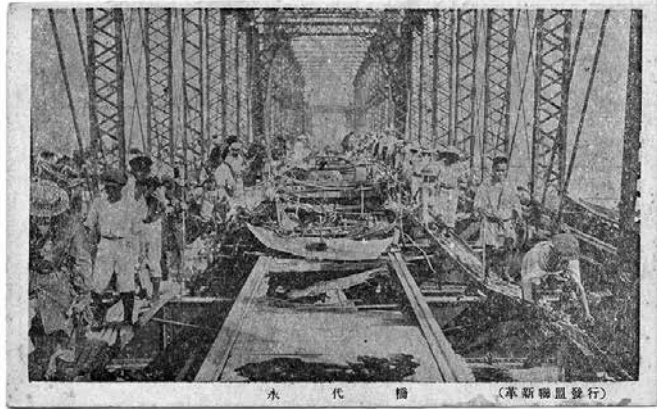


写真1 絵葉書「永代橋(革新連盟発行)」

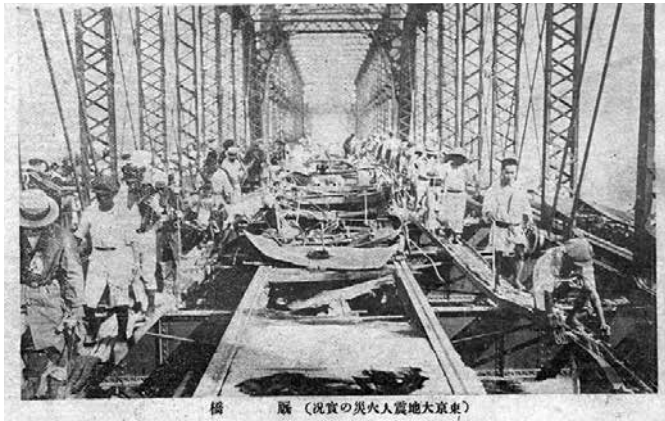


写真2 絵葉書「(東京大地震大火災の実況)厩橋」



写真3 絵葉書「(東京名所)永代橋」



写真4 「厩橋」

『東京石川島造船所製品図集』(東京石川島造船所、明治36年)
(国立国会図書館デジタルコレクション)

写真1・2の絵葉書はともに大正12年(1923)9月に起きた関東大震災時に被災した橋を撮影したものです。中央に東京市電のレールがあり、その両脇に配線の束がむき出しになっています。床版は木製だったため焼失し、避難民は焼け残った配線の上を歩いています。

写真2は厩橋(現台東区駒形2・蔵前2)〜現墨田区本所1)と印字されています。果たしてどちらが正しいのでしょうか？
答えはトラス※の形から分かります。参考に被災前の永代橋の絵葉書(写真3)と、厩橋の写真(写真4)とを比べてみましょう。いずれも3連のトラス構造ですが、トラスの上弦材の側面形状が永代橋は山状なのに対し、厩

橋は直線のうえ中央のトラスが両端のものより一段高いことが分かります。また、橋門構のデザインは、永代橋・厩橋ともに連続した斜格子状なのですが、永代橋は斜格子部分に草花文の装飾(鋳物製)が施されていました(写真5④)。写真1・2を見ると装飾は確認できません。以上のことから、厩橋が正しいことが分かります。

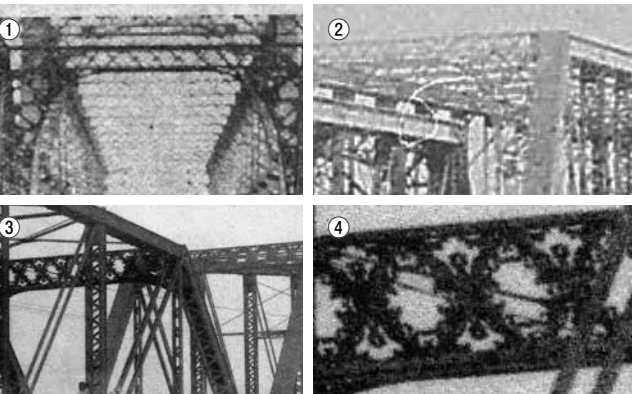


写真5 トラスの比較

①は写真2、②は厩橋(写真4)、③は永代橋(写真3)の各部分アップ
④は永代橋(写真3)の橋門構の部分アップ

※トラス(橋)

複数の材を三角形の骨組構造にすると、強度が高くなります。これをトラスと呼びます。この構造を使った橋がトラス橋です。江東区内に残る震災復興橋梁に多く見受けられます。

斎藤家の御守・祈祷札

斎藤家について

本誌290号、『江東区文化財研究紀要』第21号では、砂町(村)の大石家の御守・祈祷札等を事例にして当該地域の信仰について考えました。今回は、大島の旧家斎藤家に残された御守・祈祷札、さらに、残存する石碑から大島の信仰・講について述べていきます。

『砂町誌』(大正15年)によると、もともと斎藤家は小名木村にて米・酒・馬糧を販売していましたが、豊次郎(1860〜1928)の代に、又兵衛新田(現東砂1付近)にて米穀商として販路を広げ、明治17年(1884)に小名木川を往復するための渡船場「草屋の渡し」(現東砂2-13)大島8-39(区登録史跡)を設立しました。なお、これに関わる史料は「斎藤家文書」として区の文化財に登録されています。ちなみに豊次郎は、大正13年(1924)、砂町第八区の区長に選出され区政に関わりました。

斎藤家の信仰

斎藤家には、寺社より授与された近代以降のものと推測される230点以上に及ぶ御守・祈祷札が残されています。成田山新勝寺(千葉県成田市)の51点を筆頭にして、上妙寺(東砂1・図1)の36点、稲荷神社(特定不明)の16点、平間寺(川崎大師・神奈川県川崎市)の15点、持宝院(北砂4)の12点、出羽三山神社(山形県鶴岡市)の12点、富士浅間神社(静岡県富士市)の11点、安楽寺(元三大師・茨城県常総市)の8点、伊勢神宮(三重県伊勢市)の6点、出雲大社(島根県出雲市)の5点などがあります。

このように斎藤家は、宗教・宗派を問わず広域の寺社から御守・祈祷札を授けられていました。こうしたあり方(信仰形態)は、斎藤家特有のものではなく、近隣の八郎右衛門新田(現東砂)にあった大石家も同様であり、さまざまな神仏による除災招福を求めたものでした。

斎藤家と善光寺

【史料1】(図2)・【史料2】からは、斎藤家と善光寺(長野県長野市)の関係を窺うことができます。



図2 証状(江東区蔵)

【史料1】

證

一金巻

為斎藤家先祖代々之菩提

右者精靈回向料正二受納候也

善光寺別当

大正十三年 大勸進執事

五月十六日

斎藤豊次郎殿

この証文は、豊次郎が先祖代々の回向供養のため善光寺に布施を行ったことを同寺が証したものです。

【史料2】

斎藤覺三氏

本院所屬東京砂町八日講

世話人ヲ囑託ス

昭和十三年三月二十八日

善光寺別当大勸進

【史料2】は、善光寺別当大勸進の名において、覺三(豊次郎の長男)が砂町の八日講の世話人を囑託されたことを示すものです。このように、かつての大島地域には、善光寺への信仰をもつ講が存在したことが分かります。

大島の講―丸不二講―

宝塔寺(大島8)の境内には、「大先達加藤忠治之碑」(大正13年(1924)建造、区有形文化財)があります。石碑には、初代加藤忠治、さらに、15〜28代と推定される丸不二講の先達の氏名と命日が刻まれています。また講名である「大島講社」、「亀戸講社」ともに講員117名の氏名が刻まれています。

同碑よりも古い明治28年(1895)に建造されたものに「丸不二講先達五十年記念碑」(区有形文化財)があり、初代〜14代の同講先達の氏名、110名の世話人、施主の名が刻まれています。また、この中には、大島村(町)議員の名も見られ、同講が地元の有力者をはじめ多数の人々により構成された講であったことが分かります。

丸不二講は、富士講のひとつであり、その開始時期については不明ですが「紙本着色富士講物印図」(田端富士・三峰講所蔵)によると、天保13年(1842)頃にはその活動が窺われます。前記した二つの石碑から、江東区域では、丸不二講を構成する複数の講(明治期には五つ)の存在が確認されます。丸不二講による奉納物の多くは、もともとは亀戸浅間神社境内にありましたが、現在は、亀戸浅間公園内(亀戸9)の「亀戸の富士塚」にあります。

一方、区外にも丸不二講が用いた「マネキ」(小旗)等の講具が残されており、今後調査をすすめていきたいと思えます。(文化財専門員 大関直人)



図1 上妙寺 鬼子母神擁護之祓札(江東区蔵)

関東大震災から100年 震災後の社会事業と江東区

大正12年（1923）9月1日、未曾有の被害をもたらした関東大震災から数え、令和5年（2023）は百年目となることから、今年度の『下町文化』は、震災からの復興についてテーマごとにとりあげてきました。今回は、「社会事業」に焦点を当て、震災後の状況についてみていきます。

そもそも、社会事業とはどのようなものなのでしょうか？為政者や商人・地主などといった富者による救恤は、古くから見られるものでした。大正3年（1914）から始まった第一次世界大戦をうけ、日本は軍需品や日用品などの輸出が増大したことにより好景気となりました。ところが、それに合わせて物価も上昇したことで引き起こされたのが同7年の米騒動でした。富山県内各所で起きた米価引下げの運動が、メディアを通して日本全国に波及したことで、政府や各自治体も対応を迫られることとなります。「社会事業」という言葉はこの頃から本格的に使われはじめました。東京市は、同8年に東京市社会局を設置して、貧困者の救助や労働支援、社会事業をすすめるた

めの各施設を設置していきます。関東大震災はその最中に起こりました。

震災前に江東区に設置された社会施設は、大正8年の富川町市場と同12年の富川町託児所、古石場市営住宅でしたが震災によって大被害をうけました。そして、多くの人々が焼け出され、深川公園や清住町の岩崎邸庭園などで避難生活を余儀なくされたのです。

社会局は、9月12日に深川区などの被災地に移動市場、27日には深川公園内に牛乳配給所を設置しました。また、11月21日には市内44ヶ所に外来診療所を設け、被災者の診療を行い、深川区域では富岡八幡宮境内が選ばれました。12月には、深川公園内に職業紹介所やバラックの臨時市場、簡易宿泊所が相次いで建てられています。翌13年1月には霊岸小学校や猿江小学校など市内10ヶ所に給食所が置かれ、2月には黒江町に深川公衆食堂が設置されるなど、震災から数ヶ月の間に東京市内に被災者のための施設を配置していき

ました。一方で、震災から2ヶ月後の11月1日の『朝日新聞』の記事を見ると、罹

災者の救済は打ち切り、窮民のみとする旨の通達が出されています。翌13年の12月には、2月に霊巖寺に設置した霊岸町臨時浴場廃止決定に対して周辺住民500名が存続を嘆願しています（『読売新聞』12月18日号）。もともと社会局は窮民救済のために設けられた組織であり、少しずつ震災対応から通常対応へと移り変わっていったことが想起されます。

しかし、隅田川東岸の本所・深川両区は、特に被害が甚大であったこともあり、復興を諦めて工業地帯にすべきなどの新聞記事まで見られるほどでした。また、震災から1年が経過した10月12日には3度の高潮によって多くの家屋が浸水被害を受け、復旧に水を差しました。このような中で、徐々に復興事業が進められていったのです。あわせて長年の懸案事項でもあった区画整理事業も行われます（詳細は『下町文化』前号の「変貌した深川 土地区画整理の実施」を参照のこと）。区画整理によって、社会事業施設もとの場所から移転したり、「市民館」「方面館」という名称のもと、託児所や児童相談所などの複合施設が誕生しました。

ちなみに黒江町に出来た深川公衆食堂は、大正15年3月31日付で廃止され

ますが、震災以降もうち続く不況により、昭和7年に最後の市設食堂として、田町とともに深川食堂が設置されています（現深川東京モダン館）。

ところで、このような社会事業は、東京市だけでなく、さまざまな担い手が登場します。例えば、明治44年（1911）、浄土宗の僧侶渡辺海旭によって立ち上げられた浄土宗労働共済会は、隣保事業や職業紹介、幼児教育などをすすめていました。大正14年7月8、9日の両日、共済会の深川簡易宿泊所内で寄付相撲会を開催し、被災者の慰問をしました（『読売新聞』大正14年7月13日号）。また、翌15年1月26日には築地本願寺が深川公園隣接地に深川会館を竣工させ、幼児教育などを行いました。昭和5年には猿江裏町にあそか病院が開院しますが、これは西本願寺法主大谷光尊の二女九条武子の詩集『無憂華』の印税を基金として誕生したものです。ちなみに「あそか」の名称は、無憂華のサンسكريット語「アシヨカ」からつけられました。同年10月、社会事業家小坂芳春は深川区塩崎町に天照園を設置しますが、これは猿江町のバラックに収容されていた罹災者たちを収容したもので、共同宿泊所や託児所、公衆食堂といった施設が作られています。

「帝都復興」がアピールされたのは、この昭和5年のことで、3月24日に昭和天皇の市内巡幸、ひき続く2日後の26日に帝都復興祭が執り行われました。このような国を挙げての一大行事は、震災からの復興を強く印象づけるものでした。しかし、社会事業の必要性は決してなくなったわけではありません。震災で焼け出された人々は、東京市内を離れ、周辺町村や他県出身者や身寄りのある地域に移住していきま

す。東京市周辺の町村は、人口が増大したこともあり、東京市に編入しようという動きがあらわれます。その結果、昭和7年10月1日、東京市は15区から35区へと拡大し、現在の東京特別区(23区)のエリアとなりました。

このように市域が拡大したことで、東京市の社会事業も変化を遂げるようになります。翌8年、各区役所内に社会事業を担う社会課が設置されますが、これは予算的にも人員的にも社会局の負担が増大したことによるものです。

昭和14年6月、東京市社会局の業務は厚生局へと引き継がれ、社会局は廃止となりました。

(深川東京モダン館管理事務所)

副所長 龍澤潤

【表】深川区の社会事業関係年表(大正8~昭和5)

年	月	日	できごと	年	月	日	できごと
大正8	12		東京市社会局庶務規定が制定(東京市社会局の誕生)		8	15	千田町に深川授産場設置
(1919)	12	14	富川町市場設置		9	24	古石場市宮住宅に食堂付設
大正10	1		深川区内に6ヶ所の方面事務所を設置	大正14	9	30	猿江裏町にトラホーム治療所設置
(1921)	3	11	深川区役所内に臨時職業紹介所設置	10	27	古石場第一、古石場第二託児所設置	
	2	1	富川町託児所設置	12	21	富川町簡易宿泊所設置、食堂を付設	
	3	1	古石場市宮住宅設置	12	21	深川公園簡易宿泊所廃止	
	3	31	深川区役所内臨時職業紹介所廃止		1	31	猿江裏町のトラホーム治療所廃止
	6	4	富川町児童相談所設置	3	31	猿江・古石場牛乳配給所廃止	
	9	1	関東大震災、多くの社会施設が被災	3	31	深川公衆食堂廃止	
大正12	9	12	深川区をはじめ本所・浅草・下谷・神田・日本橋・京橋・芝の各区に移動市場を設置	4	13	古石場仮設公衆浴場、古石場公衆浴場と改称	
(1923)	9	27	深川公園内に深川公園牛乳配給所設置	5	1	猿江質屋設置	
	11	21	富岡八幡宮境内など市内44ヶ所に外来診療所を設置	5	30	古石場第二託児所廃止、それに伴い第一託児所は古石場託児所と改称	
	11	23	富川町託児所内に富川町牛乳配給所設置	6	12	猿江公衆食堂設置	
	12	5	猿江裏町内に猿江牛乳配給所設置	9	3	千田町託児所設置	
	12	10	深川公園内に深川公園職業紹介所設置	10	5	西平井町託児所設置	
	12	17	深川不動尊前に深川公園バラック建臨時市場設置	10	14	古石場第二収容所廃止	
	12	29	深川公園内に深川公園簡易宿泊所設置		2	4	深川公園職業紹介所、大住町へ移転し深川職業紹介所と改称
	1	10	霊岸小学校、猿江小学校など市内10ヶ所に給食所設置	3	31	富川町ほか市内5ヶ所の牛乳配給所廃止	
	1	15	浜園簡易宿泊所設置、食堂を付設	昭和2	3	31	古石場第一収容所廃止
	1	17	本村町バラック建臨時市場設置	3	31	深川公園バラック建臨時市場廃止	
	2	1	黒江町に深川公衆食堂設置	4	11	本村町公衆浴場設置	
	2	1	富川町託児所など3ヶ所に給食所設置	4	23	深川産院設置	
	2	12	深川公園職業紹介所に賃金立替事業付設	12	16	千田町託児所、千田町296へ移転	
	2	20	霊巖寺境内に霊岸町公衆浴場設置		5	1	牡丹町にトラホーム治療所設置
	2	20	西平井町公衆浴場設置	昭和3	8	31	深川質屋、古石場町21へ移転し古石場質屋と改称
	3	31	千田町の宇迦八幡神社境内など市内12ヶ所の外来診療所廃止	9	20	富川町託児場、区画整理のため東森下町61青バラックへ移転し事業継続	
大正13	3	31	深川区をはじめ本所・浅草・下谷・神田・日本橋・京橋・芝各区の移動市場廃止		3	11	富川町託児場、区画整理のため八名川町16番地八名川小学校跡へ移転、3月18日より事業継続
(1924)	4	1	古石場町に深川質屋設置	4	1	古石場託児所に児童相談出張所設置、5月9日より相談事務開始	
	4	1	深川公園職業紹介所の普通紹介中止	6			深川・下谷両産院、細民妊産婦のため巡回助産班創設
	4	1	清住町岩崎邸庭園内に深川簡易療養所設置	9	5		東京市設食堂名称、猿江公衆食堂を猿江食堂などと変更
	4	4	深川公園内に給養所設置	9	26		千田町質屋設置
	4	30	千田町第五方面事務所隣など市内19ヶ所の外来診療所廃止	10	1		深川職業紹介所、富川町31番地に移転
	7	15	古石場仮設浴場設置	10	12		富川町質屋設置
	9	10	深川公園給食所廃止		1	1	東京市設簡易宿泊所の名称、富川町宿泊所・臨時浜園宿泊所などと定める
	9	24	岩崎庭園内に給食所設置	2	25		古石場託児所、古石場町17-2に移転
	9	30	東大工町消毒所内・古石場町市宮住宅内など市内7ヶ所の外来診療所廃止	3	5		富川町児童相談所、富川町49に移転
	12	1	震災罹災者貧困者救護のため古石場第一収容所を設置	4	15		東京市児童相談所の名称、富川町児童相談所は富川町市民館、古石場児童相談所は古石場市民館などと改称
	2	5	六間堀託児所設置	4	15		千田町方面館設置
	3	7	深川公園牛乳配給所廃止	4	15		東京市託児所の名称、富川町託児所は富川町市民館、古石場託児所は古石場市民館などと改称
	3	28	本村町市宮住宅設置	6	15		浜園宿泊所設置、浜園食堂を付設
大正14	3	31	霊岸小学校内など市内17ヶ所給食所を廃止	9	1		富川町など4質屋、生業資金貸付を開始
(1925)	3	31	六間堀託児所廃止	12	15		霊岸町質屋設置
	3	31	霊岸町・西平井町など市内7ヶ所の公衆浴場廃止				
	4	1	震災罹災者貧困者救護のため古石場第二収容所設置				
	4	1	古石場町に牛乳配給所設置				
	7	31	深川簡易療養所廃止				

深川「鶴左」の引き札

深川仲町の金子横町（丁に同じ）にあった「鶴左」。その鶴左が弘化3年（1846）3月に作成した引き札（現在の広告）を通して、当時の経営の様子を見ていきたいと思います。

「口演」（口で述べる）の表題をもつこの史料では、火災で焼けた新吉原の仮宅（一時的な施設）が深川に設けられるのを契機に、工夫を凝らして、「玉子免し、大根久めし、山吹めし、鶏卵茶めし」の4種類のメニューを売り出しています。値段は、それぞれ一人前64文、48文、64文、72文とあり、「出前沢山仕候」の一文も付されています。

内容は、「けいらんの極製に、浅くさ海苔のふう味にて、深川あざつけとりまぜて、大根久めし大あぢを、おいらんがたへあげたいと、金子よこ町の山富貴めし、水もまされる玉子めし（中略）けいらん茶飯のあちわいは、是も鶴左が新工風」と口上風に記したあと、「ひょうはん」を繰り返しています。売り初めは、3月18日で、当日は「鹿景」謙譲語でそまつな景品の意味を用意ともあります。

岡持にも書かれているように、この

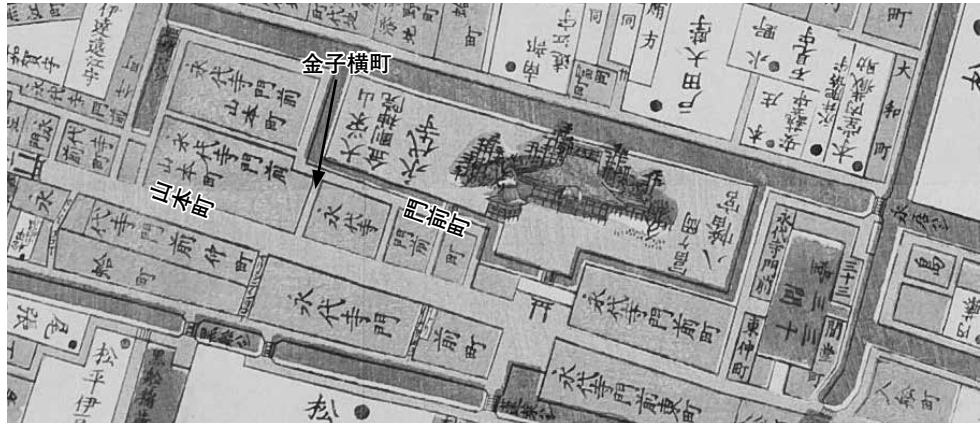
店は玉子めしが売りのようです。「その賑わい深川の人氣もまさる」とあることから、仮宅の設置を、経営発展の契機と捉えていたことがわかります。



鶴左の引き札 大きさ ヨコ410×タテ142(単位mm)

「金子横町」の場所は？

ところで、史料に見られる金子横町とは、どこに存在したのでしょうか。気になるところです。史料の最後の方に「深川仲町金子横町」と記されていますので、深川門前仲町（以下「仲町」）かと思いきや、どうも違うようです。そこで、江戸の各町の詳細な情報が盛り込まれている



本所深川絵図(部分)

る『町方書上』（以下『書上』）を調べてみました。

同書をつぶさに見ていくと、深川永代寺門前町（以下「門前町」）の項に金子横町の文字を見つけました。そこには「町内北側金子横町」とあり、続けて「右の訳柄は同門前山本町（以下「山本町」）より申上候」と記されています。「訳柄」とは、金子横町と呼ばれるようになった経緯のことです。そこで山本町の項を見てみると「町内東の方同門前町続横町を里俗金子横町と唱候」と記され、続いて「右は安永の頃金子屋新八と申者、同所に住居仕候故に唱来申候」とあります。すなわち、山本町の説明では、安永の頃（1772～81）に金子屋新八なる人物が住んでいたことから、地元では金子横丁と呼ばれるようになったということです。

「本所深川絵図」を見ると、門前を東西に走る往来（現在の永代通り）を挟んで永代寺門前町が位置し、その西側に山本町と仲町がありました。『書上』の記述から察するに、門前町の北で、山本町の東の門前町に続く横町が金子横町のようにです。

その横町にあった「鶴左」。その引き札の内容は、江戸深川の商売情報を盛り込んだ、大変貴重なものといえます。

（文化財主任専門員 出口宏幸）